



年譜

建物の入り口には、大観の90年の歴史を物語る年譜が置かれている。大観は人生の大半を湯島で過ごした。

若かりし頃の
ポートレート

建物に入ると、すぐに大観の肖像写真が目に入る。大観の肖像といえば晩年の姿が有名だが、これは40歳頃の貴重なもの。



建物内部に
使われた木々

大観は家を建てる際、使用する木材にも1つ1つこだわった。建物自体は装飾のない簡素な作りだが、使われている材料はどれも高級なものばかり。かりんや桜、屋久杉などがふんだんに使われている。



横山大観記念館

- 所在地/東京都台東区池之端 1-4-24
- 最寄駅/東京外口千代田線「湯島」より徒歩7分、東京外口銀座線「上野広小路」より徒歩12分、JR「上野」または「御徒町」より徒歩15分、京成線「京成上野」より徒歩15分
- 開園時間/午前10時～午後4時(入園は午後3時30分まで)
- 休園日/月曜、火曜、水曜、夏季(2017年は7月24日～8月31日)、年末年始(2017年は12月18日～翌年1月10日)
- 入園料/一般 800円/中高生 650円/小学生 300円/障がい者 650円

現在は「月下逍遥」展示中。2017年12月17日まで。横山大観「夜」「むさし野」「月見布袋」「月下逍遥」、岡倉天心「五浦即事」、菱田春草「秋の夜美人」など、月にちなんだ作品を展示しています。



堀や地面に高低差や勾配をつけることで、庭の立体感や奥行きを出している。大観は手入れを好まず、ありのままの自然の姿を求めた。

げられていた日常の風景を、いくつも作品に残したのです。建物内には、他にも当時の様子を垣間見られるものが数多く残っていました。例えば、客間や廊下に使われた大きめの窓ガラス。佐藤さんによると、このようなサイズのガラスは珍しく、大変贅沢なものだったそう。斜めから覗くと歪んで見えて、味わい深いものです。

日本家屋に飾られた作品たち

見どころは建物だけではありません。「この記念館の特徴は、大観が生きていた頃の様子に想いを馳せながら、日本家屋に飾られた

作品を堪能していただける場所です。本物の絵を床の間に飾り、それを見ていただける空間というのは今ではあまりありませんから、ぜひそういった楽しみ方もしていただきたいですね。展示作品は3カ月ごとに入れ替え、四季を感じていただける作品や、画材、書簡、大観が愛した絵画や書などを厳選しています。そもそも日本家屋は絵を並べ立てるものではありませんから、展示作品はあくまでも控えめにしています」と佐藤さん。その言葉通り、ここは大観が実際に生活をしてきた家で、こだわりの庭や建築素材、数多くの名作が



いつも清潔で整理されていたという2階の画室。電灯では墨の繊細な調子が見えないため、制作は陽の光のもとで行われた。

生まれた空間に感動しながら、作品を観覧できる貴重な場です。当時の時代背景や武士を意識した生活空間を感じながら、日本画の奥深き世界を堪能してみたいかがでしょうか。



1階の客間。客人が座った時に最も庭が美しく見えることを重視し、大観は庭の設計を行った。原種の桜が好みだったため、敷地内にはソメイヨシノではなく大島桜が植えてある。

大観の全てがここに

近代日本画の巨匠・横山大観は、上野池之端の不忍池のほとりに自宅兼画室を構え、89歳でこの世を去るまでこの地に住みました。巨匠のこだわりが詰まった木造2階建ての数奇屋風日本家屋は、現在記念館として公開され、訪れる人の目を惹きつけています。今回は、記念館の学芸員を務める佐藤志乃

さんと共に、巨匠の息遣いが感じられる建物内をご案内しましょう。

大通りに面した重厚な門をくぐると、まるでそこだけ時間が止まったかのような静寂な空間が広がります。野趣あふれる庭園、自然木



都内の名処



巨匠の息遣いを感じる空間

2 横山大観記念館

東京に観光名所は数あれど、あまり知られていない穴場スポットは数多く存在します。そんな「都内の名処」を、シニアライフ・コンシェルジュ藤野政史がご案内します。今月は、上野池之端・不忍池のほとりにある「横山大観記念館」に出掛けてみましょう。



藤野政史

グローバルライフ株式会社
代表取締役
シニアライフ・コンシェルジュ
シニア世代の皆さまが楽しく、笑顔で、遊び、学ぶ、集う会「グローバルライフクラブ」を運営。

「都内の名処」を募集中!

グローバルライフクラブ 検索
0120-70-0202

の風合いを生かした簡素で瀟洒な居室や画室。ここ「横山大観記念館」は、巨匠が愛した日本の伝統美がふんだんに取り入れられた空間なのです。

「明治41年に上野の地に住み始めた大観は、大正8年にこの地に自宅兼画室を建てますが、昭和20年の東京大空襲で焼失してしまいました。けれど自身のデザインによる建物と庭園、そしてこの地に愛着を持っていったことから、昭和29年にほぼ同じ形で再建し、昭和33年に亡くなるまでここを拠点に活動しました。細川護立侯爵から贈られた庭石のある庭園の樹木などは、多くの大観作品の画題となっています。中庭にはかりんの木がありますが、大観が生きていた頃は竹林でした。みみずくが竹に止まった様子を描いた「みみずく」という作品をご存じの方も多いのではないのでしょうか。当時は実際にみみずくが来ていたそうですよ」と佐藤さんが教えてくれました。「みみずく」は私も大好きな作品です。大観は、この自宅兼画室で繰り広